（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　　岡田　絵美

本論文は、仏教における非暴力運動が基づく宗教的論理やエトスを、ベトナム戦争中のベトナム僧による抗議運動、ダライ・ラマ 14 世を中心とするチベット僧の独立運動、日本山妙法寺教団による平和運動という三事例について分析したものである。仏教には、特に欧米社会では不殺生というイメージが定着している一方、ベトナム僧、チベット僧の焼身行為による過激な抵抗運動という一面もあるが、本論文は、ダライ・ラマすらも絶対的平和主義者ではなく一部の戦争を正当化したことなどを指摘しながら、このパラドクスを宗教内在的に解きほぐすことを試みている。タイトルの「二つの真理」とは二諦論を指し、一般にいう非暴力運動は世俗諦の次元で良しとされる行為であり、仏教ではその上に善悪を超えた勝義諦が措定されることがパラドクスの源にあることが示唆されているが、本論文の評価されるべき点は、そのことを演繹的に論じ、宗教は暴力を肯定することも否定することもあると一般論を述べるのではなく、歴史上の特定の政治的状況下でどのような論理や感情の交錯が生じ、暴力と非暴力の境界自体が変容したかを文献調査と参与観察により具体的に詳述したところにある。

第 1 章では非暴力思想に関する先行研究が精査され、第 2 章では仏教思想史における戦争や自己犠牲を含む暴力の位置づけ、僧団と国家権力や近代的ナショナリズムとの関係が概観されている。この予備考察をもとに、第 3 章では 1960 年代のベトナム仏教における非暴力的抵抗運動の展開、その過程で焼身行為に与えられた意味を論じている。第 4 章では、1950 年代から現在に至るチベット仏教において暴力的運動が非暴力に転じた経緯、亡命政権内の複数のアクターによる暴力・非暴力行為の解釈の相違を分析している。第 5 章では、日蓮宗系の団体である日本山妙法寺が、戦前・中の国家協力と戦後の平和主義をその教義・実践にどのように結びつけてきたかを論じている。

ベトナムとチベットの仏教僧の非暴力運動については平和研究などにおいて多様な研究がなされてきたものの、歴史的実態と宗教思想の双方を結びつけつつ総体的に論じ、さらに日本の事例と比較した研究は管見の限り他に例がない。また、平和研究ではいかに平和を実現するかという実践的な観点からこれらの事例が扱われるのに対し、本論文はそこからあえて一歩引き、そのような運動を深層で方向づけている宗教の論理を解明している点で、宗教学ならではの貢献をなしている。翻って宗教学に向けては、近年盛んな宗教の社会貢献活動研究に対し、非暴力行為がもつ他者排除と包摂の二面性を鋭く指摘するという問題提起となっている。国際的に注目を浴びやすいテーマであるだけでなく、日本の事例として妙法寺をとりあげるなど、海外在住期間の長い筆者ならではの着眼点は日本の宗教研究者にとっても新鮮である。以上の理由から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。